

成果報告書の要約

助成番号 第 66-4 号  
助成研究名 移動困難者を対象とした自転車教育プログラムに関する研究  
助成期間 平成 28年 7月 ~ 平成 30年 2月 (20ヶ月間)  
所属 公益財団法人  
公害地域再生センター  
氏名 藤江 徹

キーワード

乳幼児連れ、高齢者、交通安全、自転車、バリアフリー、教育プログラム

(研究目的)

本研究では高齢者および子育て世代の自転車の利用実態を把握し、それに基づいた自転車が他の交通手段と共生できるバリアフリー環境を目指した教育プログラムの開発・評価を行うことを目的とする。多様な主体を対象とした教育プログラムは多様な自転車ユーザーの安全を守りスムーズな走行を助けるだけでなく、歩行者をはじめとした他の交通手段のユーザーの安全も守ることになると考えられる。

(研究方法)

研究方法は、下記の3種類の調査を行った。

- (1)自転車教育の先進事例の把握  
日本国内および他国において行われている自転車教育の先進事例の調査を行った。
- (2)移動困難者の自転車の利用実態の把握  
高齢者および子乗せ自転車の利用実態を把握するために、走行調査、アンケート調査を行った。
- (3)自転車教育プログラムの検討  
(1)(2)の結果を踏まえて、自転車教育プログラムを検討し、実施した。

(研究成果)

(1)自転車教育の先進事例調査

先進事例調査から、一方的に情報を伝達するのではなく、お互いに共感を得ながら再度自転車の乗り方を学ぶ必要性について納得してもらうことが重要であるとの知見が得られた。

自転車の走行のビデオ撮影調査、アンケート調査を行い、高齢者、子乗せ自転車の利用実態を把握した。

ビデオ撮影調査の結果、高齢者、子乗せ自転車の平均走行速度、最高速度において有意な差は見られなかった。アンケート調査では、高齢者は他の属性と比較していずれの項目についても自転車交通ルールを「守っている」と回答している人の割合が高かったが、実走実験とアンケート回答を比較すると「アンケートで守っていると回答しているのに守っていない」人の割合が高く、ルールの認知と行動の間にギャップがある人が多いという結果になった。一方で子乗せ自転車ユーザーはルールの認知と行動の間にギャップがある人は少ないが、ルールを認知しながらも守っていない人の割合が高かった。

以上のことから、高齢者と子乗せ自転車ユーザーではルールの認知と遵守において差があることがわかり、同じような教育方法では効果が出ない可能性があると考えられる。高齢者はルール遵守の認知と行動の間にギャップがあるため、自分が自転車で走行している様子を撮影したビデオを見せながら行動を認識してもらったうえで、自転車の交通安全教育を行うことが効果的ではないかと考えられる。一方で、子乗せ自転車ユーザーが違反と認識しながらも守っていない理由は今回の調査では把握できなかったが、認知と行動の間のギャップは小さい人が多いことから交通ルールを守らないことによる事故や危険のリスクをきちんと伝えていくことが重要ではないかと考えられる。



写真 自転車走行調査で撮影した映像の例

(研究成果続き)

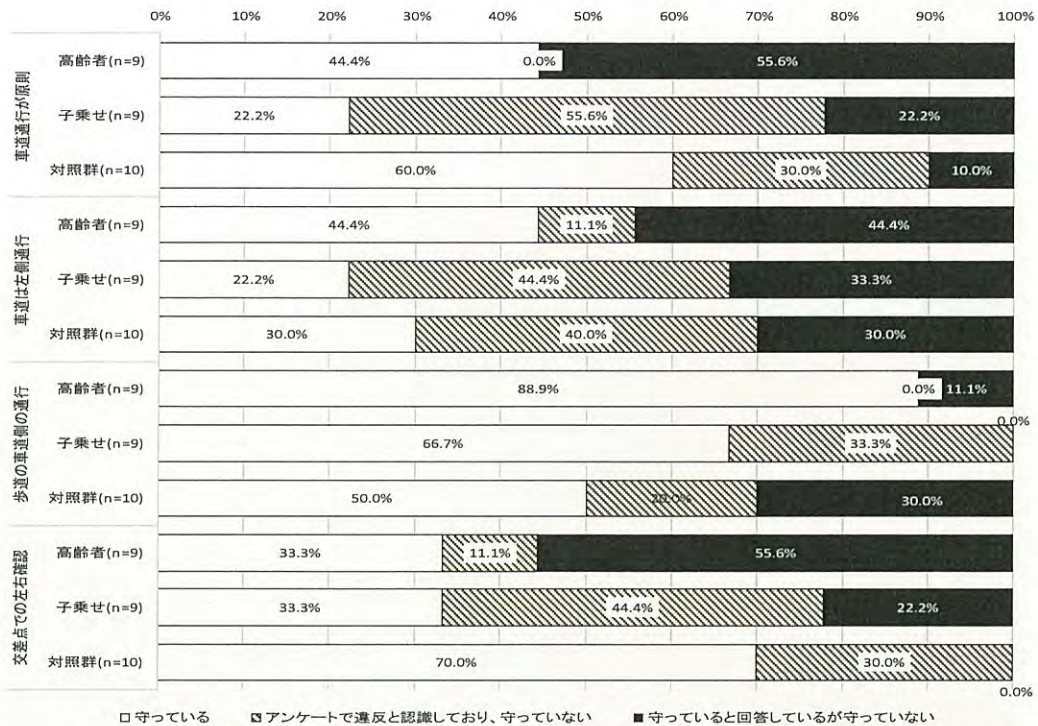


図 ビデオ撮影調査による自転車ルールの遵守の様子と自転車交通ルールの認知

(3) 自転車教育プログラムの検討

少数対象の教育プログラムおよび多数者を対象にした自転車教育パンフレットの2種類の自転車教育プログラムを検討し、実施した。

少数対象の教育プログラムでは、①自転車交通ルールクイズ、②自転車走行動画のフィードバック、③座談会からなる自転車勉強会を企画し、実施した。その結果、高齢者には、自分が自転車を走行しているビデオをみることで、交通ルールを守っていない時もあるということを確認してもらうことができた。また、子乗せ自転車ユーザーは、ルールを知っていながらも利便性を重視してあえて守っていない人がいることがわかり、どのような危険性があるのかを伝えることで、交通ルールを守る重要性を理解してもらった。

また、上記の調査をふまえて、「危険予測を行う重要性」、「他の交通ユーザーとのコミュニケーション」、「鏡の法則『人のふりを見てわがふりなおせ』」、「自転車に関する情報を提供」の4つの方針を元に、自転車教育パンフレットを作成した。



写真 自転車勉強会の様子

交通ルール	クイズ	回答
① ヘルメットの着用		
② 車道の左側走行		
③ 歩道は歩行者優先で、車道寄りを行		

図 自転車交通ルールクイズ(一部)